

〔翻刻〕 脇方高安流宗家所蔵『語』

—— 船弁慶 半部 誓願寺 忠度 ——

飯 塚 恵理人

能の「語」にはシテが担当するもの以外に、「脇語」という脇の担当する「語」がある。これは、脇方の家では非常に大切なものとして伝承されてきた。

脇方高安流宗家高安勝久氏は、尾張藩の御役者(脇師)であった西村家の流れを汲み、西村家に伝わった脇方の伝書を多く所蔵されている。

そして、その伝書類のなかに、「船弁慶」「半部」「誓願寺」「忠度」の四曲の「語」を含む伝書があった。高安流の「脇語」の詞章については従来明らかになっていない。

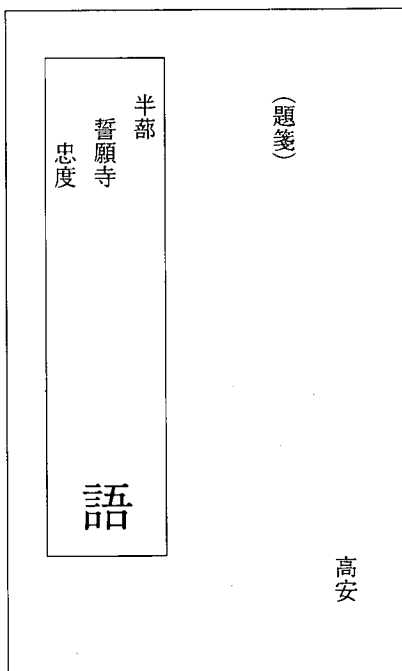
そこで今回は、高安勝久氏の御好意により、脇方の秘伝書の一つである「語」を翻刻させていただくこととなった。底本は江戸時代後期以降の写本と考えられるが、奥書等はない。

凡 例

原本を忠実に翻刻することを目的としたが、印刷の都合上以下の点を改めた。

- 1、旧字体は原則として新字体とした。
- 2、カタカナ等の送り仮名は全角で表記した。振り仮名はルビとした。
- 3、原本で丁の変わる部分には「」をつけ、表を(オ)裏を(ウ)と表記した。
- 4、句読点は原文の通りとした。

[表紙]



[付箋]

船弁慶語

軍の方便候や。おこと存知のことく。兵都を去てあの一谷に城廓をかまゆといへ共。皆東国へ心を移し源氏に對しぬ。去程に鎌倉殿の御誂にハ。三河守範頼。九郎大夫の判官義経に。今度の大将を仰付らる。範頼ハ大手生田の森の大将。五万余騎にて向ひ給ふ。又我君義経ハ。一万余騎にて丹波路へおもむき。三草山よりひよとり越へにかゝり。鉄柵か峯を落し玉ふ事人間の業ならず。大手からめて相つらなつて。一時か程に攻おとす。一人の高名其沙汰世にかくれなし。又先帝を始奉り。一門の人々船に取乗。寿永のもミちのことくちりくへに成玉ひて候。我君の御手柄中へ申もおろかに候

[本文]

秘事二候

一 誓願寺

一 半部

三 忠則

ワキへ唯今顯れたる女を如何成者そと不審をなして候へハ。何かしの院にも常ハさふらふ誠にハ。五条あたりと夕兒の。空めせしまに姿を見失ひて候。是に付思ひ出したる事の候。我尾にて侍りし時。源氏物語を承りて候ま、(一オ)。夕兒の巻の有増語つて聞せ申候へし

語。抑光源氏。六条わたり御忍ひありきの比。大貳の乳人尼に成けるを訪(頭注：トフラヒ 訪 尋義也)ひ給ハんと。或夕つかた五条わたりへ尋させ給ふ。御車の入へき門はさしたりけれハ。人を返させ給ひて暫待せ給ふか。あたりに桧櫃新うして。上ハ半部四五間ばかり(一ウ)明わたしたる簾の内より。いと白きすき影あまたみへたり。其家の軒のつまに。白き花の心よけに咲たりけるを。惟光を召てあの花折て参れと宣へは。惟光承りおしあげたる門に入ておらんとせしに。内よりきよけ成。す、しの一重なる袴長く踏みたる(二オ)たる。童女のおかしけなるか。扇を披て是にのせて参らさせ給へと有。惟光やかて其扇にのせて奉る。源氏取あけて見給ふに。白きあふきのつまいたうこかしたるかふつてならしたるうつり香。いとシミふかくなつかしきに。墨もひぬ計の哥有。心あてに(二ウ)。それかとそ見るしら露の。光りそへたる夕かほの花と。よのつねならず書すさミたり。是はそもいかなるもの、栖と問せ給へハ。物の助成ける人の家にて候しか。おのこ夷中わたらひしてめ

なん。同腹なと宮仕へ人にて。よりくき通ふと申せハ。源氏いと」  
 (3才) 御心まとハしなから。御懷より疊紙取出給ひて。おりてこそ。それかともみめ黄昏に。ほのく見つる花の夕かほ。是より御心とけさせ給ひて。互の情深かりけり。彼夕兒の花をハことに馴おはしまししかハ。夕かほの君となん申せしと也。然るに此事ミやすん所」(3ウ) に洩聞へねたましく覺しける。御思ひや通しけん。夕かほの上我かのけしきになやミ給ひて。終にうせ給ふと承候。然れハ古しへの妄執今に残て。夕顔の花の精を頭れ。かくま見へ給ふと覺候間。急き五条あたりへ立越。彼夕兒のなき跡を弔ひ申さはやと存候」(4才)

誓願寺

ワキへ不思議やな古しへの和泉式部仮に頭れ。吾に詞をかわしけるそや。いて更は此誓願寺の御謂れ。并に和泉式部此寺に帰依せられたる子細を。聴聚の人々に語て聞せ申候へし。

語。抑此誓願寺と申ハ。天智天皇の」(4ウ) 御建立。御本尊ハ春日ノ明神と賀茂ノ明神と。みそきを分て作り給ひし如来像にておはします。毎日西方浄土に通ひ給ひて。来迎引撰の盟を頭ハし給ひ。有難かりける御事なり。又和泉式部と申ハ。因幡国大江雅致の娘たりしか。和哥の才世に」(5才) 聞へ有しかハ。帝都へ召のほせられ。上東門院に仕へ奉り。弁内侍と申しか。和泉守道貞の妻と成て。後ハ和泉国にいましけれハ。和泉式部と申せし也。或時阿波の鳴門俄に震動せしかハ。貴僧高僧に謀て加持せさせ給へと其験なかりしかハ。哥を以て」(5ウ) しつむへきとて式部に仰なさせ給ふ。其時式部の哥に。えのこ草。をのか種とてあるものを。あわになると

ハ誰か言らんとよめり。此哥を書て鳴渡の海に浮へけれハ忽しつまりけるとなん。又式部ハ菩提の道に心さし深かりけれハ。性空」(6才) 上人を頼参と。播磨の書写山へと志し給ふ。此上人ハ法花書写の行を勤給ひて。六根浄にかなひしかハ。式部の登山をさとし給ひ。女人けつかいの地をけかされてハ如何あらんと。先去て山下に下り給ひて對面有。此時式部の哥に。くらきより。くらき道にそ入ぬへき」(6ウ)。はるかに照せ山の端の月。其時上人法花唯一乗の法文。無二亦無三の偈を説給ひけれハ。其時又和泉式部。ふたつなく。三つなき法と聞からに。五つのさハリあらしと思ふと。和哥を以て答へられしかハ。上人奇特の女性かなとかんせられ。猶後の世の事」(7才) を思しめさハ。誓願寺の御本尊を頼給ひ。一心に称念し給ひて。成仏疑有へからしと承仰有しかハ。則此寺に帰依有て念仏をこたりなく。臨終正念にして往生の素懷をとけられける。さあるによつてからを此寺に納めけると承候。然れハ仏説に」(7ウ) 依て。和泉式部仮に頭れ。如来の御示現をつけしらしめ給ふと覺候間。急き六字の名号を書奉り。仏前に備へ申さはやと存候」(8才)

忠度

ワキへ不思議やな唯今見候えし老人を。如何成者そと存て候へハ。薩摩守忠度の亡魂にて有けに候。愚僧俊成卿に有し時思ひ合せし事の候程に。語て聞せ申候へし

語。抑此忠度と申し人は。平家の公達」(8ウ) の中にも。文武二道に勝れ優にやさしき御事ハ世に隠れまします。中にも敷嶋の道に長し給ひ。俊成卿と和哥の御値遇浅からず。そのころ後白河法皇の勅命によつて。俊成卿千載集を撰せられしにより。忠度も其集に

入給ひ度よし御望有しか共」(9才)。折節平家ハ勅勘の御事なれハ叶ふましきよし宣ひけれとも。忠度一向御歎ヒタウき有て。西海の軍に趣給ひ。山崎辺までうち出給ふか。狐川と云所より馬引返し。俊成の許へ御出ありて。此度の軍に定て討死し候へし。願ハくは御撰集に一首にても書加へ」(9ウ) たひ給へ。今生の望是に過しと。年来読置給ひし哥の巻を。俊成卿に渡し給ひて。すぐに西海に下り給ふ。俊成にも哀れとおほしけるにや。あまたの哥の中にて。さ、浪や。しかの都ハあれにしを。むかしなからの山桜かなと云哥を書のせさせ給ひしかとも」(10才)。勅勘の恐れ有により。読人しらすと書せられて候。さて忠度ハ一谷の合戦に。岡部六弥太忠澄と組て討れ給ふ。御最期の後服に短冊の候。其哥にいわく。行暮て。木の下かけを宿とせハ。花や今夜のあるしならまし。忠度とするされたり。六弥太此たんさくをとりにて」(10ウ) 俊成卿へ渡し給ひしに。俊成卿此哥を吟し給ひて感涙をなかし給ひて候。されハ愚僧俊成卿の御内に有し者なれば。さつまの守飯に老人と現しま見へ給ふと覚へ候間。御跡を念比に弔ひて。一先都に帰り。定家卿に此由申きけはやと存候 ツレハ尤然るへう候

付記 貴重な資料の翻刻を許可いただきました、脇方高安流宗家高安勝久師に心より感謝致します。本稿の「忠度」の脇の語は平成九年一月一三日の相山女学園鑑賞能において、高安勝久師に勤めていただきました(シテ・長田駿師)。併せて感謝致します。また、翻刻に関して御協力をいただきました寛敏一師、ならびに栗花光弥氏に感謝致します。なお本稿は平成七・八年度文部省科学研究費基盤研究(C)「東海地域能楽史の研究―資料の収集・整理とデータベース化」(飯塚惠理人 深谷 哲

三木邦弘 課題番号…〇七六一〇四三八) 及び、東海学術奨励会助成金による成果の一部となります。